



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』 日本語放送 メールマガジン (第38号)

2006年3月16日発行

新刊紹介

「エクアドル — ガラバゴス・グチ・パナマ帽の国」

著者 寿里順平さん(早稲田大学教授)にきく

尾崎: ついに出ましたね。オレンジ色の分厚い本を手にしたときには、先生のご苦勞がずっしりと感じられ私も感無量でした。

寿里: エクアドルの本がいままで皆無ということもあり、1回出したら、つぎの機会までとうぶん出ないだろうし、一般向けする本でもないしということで、エクアドルに縁のある方々にお願いして一定の冊数を分担していただかないと、出版社もしり込みする現実につきあたりました。そう考えているうちに、あてにしていた方々が他界したり、書き手の趣旨と合致しなかったり・・・、私は私で胃を全摘出するなど、健康を害してしまいましたが、それがかえて転機となって、自分流に書きたいだけ書いたものを読んでもらおう、と決心して書いたものです。

尾崎: なにしる日本の外務省が「知られざる国エクアドル」と紹介する国だったのですから。共同通信の伊高浩昭記者が「アンデスの声」取材されたとき、日本語でエクアドルを紹介する本がないと言われたのを覚えています。その伊高さんが書評で次のように書いておられます。「著者は、スペイン語で『赤道』を意味する国名が多様性に富む国の実態を象徴するのにふさわしいか否かを吟味することから説き起こし、歴史、地理、人種、民族、差別、文化、民俗、宗教、言語、政治、経済、国際関係など広範な角度から立体的にこの国を描く。執筆の趣旨を『単なる観光案内ではなく、どんなことをしてきた国なのか、どんなことをしている国なのかを知る<よすが>を提供すること』と明記しているが、日本人に馴染みの薄い一国についての極めて興味深い総合的な解説書をなっている。読みやすい構成で、写真や地図も多く、旅の良き同伴書にもなるだろう。」(週刊読書人より抜粋)まさに待望の「エクアドル」を知るための絶好の書になりました。

寿里: <エクアドルの本を書くのは寿里をおいてはいない>と、私がキトの尾崎家にお邪魔するたびに言われたのが支えになりました。尾崎さんからは、いろいろな話題をいただいており、とくにエクアドルを訪れる日本人をお世話した際に起きたこの国の人々との行動や考え方の違いなどは、貴重な話です。私自身も、1961年のエクアドル・アンデス遠征隊に参加して、チンボラソ山(標高6310米)で遭難にあったのがきっかけで、現在までこの国とつながることになりました。ラテンアメリカとの付き合いは本当に長くなりました。



尾崎: スペイン語を話す国はスペイン本国だけではなく、中南米ではブラジルがポルトガル語を話す以外はすべての国がスペイン語で国の数から見ると圧倒的です。そこでNHK教育テレビでも先生に中南米スペイン語講座を担当してもらって、中南米諸国の風物、習慣やニュー・ラテン・フォークの曲の数々などを紹介されたのは画期的でした。私たち夫婦もゲストで出させていただきました。

寿里: NHKから放送した1970年代、80年代は、中南米が日本に<夢>を運んでくれた時代です。エクアドルのように、古い習慣を温存させる国なのに、奇妙に先進的なところがあって・・・。去年、この本をたずさえてエクアドルに行ったところ、キト市を囲むピチンチャ山(標高4787米)が噴火したばかりなのに、なんと頂上付近まで登山ケーブルができています。果たして火山活動は大丈夫なのだろうかかと心配しつつ試乗しました。そしたら<この国は、高齢者すべての人の国内の乗り物は半額です>というではありませんか。経済が破綻中で、そんなことやっていいのか、と。スペイン語圏の面白い点は、まだまだ尽きないなと思いました。

尾崎： HCJBの「赤道で逢いましょう」の番組にはキトを訪問されるたびに出演していただいたのですが、毎回時間オーバーになり、続きは来週のこの時間ということで連続で、実に豊富で興味深い話をたくさんきかせていただきました。何が起るかわからない中南米とはいえ、先生が来られると必ず何かが起こるので「本を書くためでしょう」と他人の気の知らず冗談を言ってすみませんでした。

寿里： たしかに私は行く先々で予想もつかないことによく遭遇しました。でも体験によって内側からものごとを見ることで本当の理解はできるのだと思います。私が面白く言うから中南米は面白いのか、またはその逆なのか、わかりません。でもこの「手法」は、ラテンアメリカ文学のなかの一分野「コストウンプリズム」に合い通じるなと思います。エクアドルでいえばチュージャ・キテーニョ(浮き上がったダンディなキトツ)の言動を通じて、ある時代の社会習慣が後世に語りつづけられています。今という時代を生き抜き、エクアドルに結びつけられた私が、このようなさまざまな実体験を材料にしてこの本を書きあげることができたのは、私にとっては天職だったような気がしています。

尾崎： 地球上、数えきれないほどの国が存在しています。それらの国々が、お互いに知り合うことができ、国としての理想を、希望を、悲しみやよろこびもともにできれば、国際関係はもっと支え合わなければというおもしろいになるのではないのでしょうか。その意味では、この一冊は、これまでの「知られざる国」を知らせてくれ、地球市民の相互理解に一役買ってくれる貴重なものです。多くの方たちにこの本が読まれて「エクアドル」が世界家族の仲間としての交わりに加えられるようにと私も願っています。あらためて執筆ご苦労まででした。

寿里： 私としては、あらゆる階層の方々に読んでいただくために、公共の図書館においてもらえるとうれしいな、と思います。図書館に備え付けの「リクエスト・カード」に「エクアドル、東洋書店、2005年」とだけ記入していただければ発注してくれます。地方の在住者の購入にも便宜を図っておりますので、下記の連絡先にぜひ、お問い合わせください。

購入先：

東洋書店
〒162-0805 東京都新宿区矢来町97
電話：03-3269-2961
FAX：03-3269-2110
ホームページ：<http://www.toyoshoten.co.jp>



右写真は、キト空港のみやげもの売り場で寿里先生を見送ったときのものです。写真中央：寿里先生(右)、尾崎(左)、両端は、国吉陽一郎、竹彦兄弟。(1979年撮影)

【寿里 順平先生のプロフィール】

早稲田大学教授・スペイン語・ラテンアメリカ社会史専攻。著書に「カリブの国々」「中米の奇跡 コスタリカ」など。

HCJB日本語放送担当

在 尾崎一夫 久子

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://japanese.hcjb.org/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「フォーラム」(<http://japanese.hcjb.org/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「メールマガジン e-La Voz らいぶらり」(<http://www.hcjb.org/japanese/mmoz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録も[HCJB日本語放送](#)までメールにてお知らせください。なお、メール・リストは配信先メール・アドレスのみで管理されていますので、配信先変更をご希望の場合には、現在登録されている配信先も併せてお知らせください。



Copyright © 2006 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://japanese.hcjb.org/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.
